



季寄
註解

改正月令博物箋

三冬部

冬

~5

6666





筆道秘旨早學問 全四冊

此本八木道之秘器口傳悉ク躡シ格法七十五点ノ筆道真義ヲ記シ諸流ノ筆形筆跡ヲ集メ筆道訓ノ傳授正体ハ景詩哥極則四体十字文能書ノ手習法名言等ヲクニ此各ヲ見テ手跡藝昔古スレハ上達スルヲ神ノ如シ其外詩哥ノ仕ヤウ石印ノ彫ヤウ等ニテ初學ノ便リニナルヲ載ス

和漢軍書要覽 小本一冊

此書ハ歷代帝王ノ興廢ヲ書ツラ子其間ノ治亂ヲ記ス日本モ唐モ古今ノ治亂其次弟大略分明ニワカル此各ヲ見テ軍書ヲヨメバ次第コンザツセスシテ面白シ

千字文國字解 大森火著 全

諸書ヲ參考シ句々註解ヲ加フ此各ヲ見テ義ヲキラカニワカル

三冬之部 印あるハ前より季ハ用ひききり

時令之部

△冬霧	冬	丁	△冬日	冬	丁
△山眠る	冬	三	△寒夜	冬	三
△冬曉	冬	四	△心空	冬	四
△心凍	冬	四	△雪	冬	五
△雪山	冬	六	△雪粥	冬	六
△粉雪	冬	六	△雪花	冬	六
△心雪	冬	九	△雪肌	冬	九
△雪消	冬	十	△雪聲	冬	十
△雪中之妙	冬	十	△富士雪	冬	十
△霜	冬	十			



霜柱 冬 霜花 冬

霜氷 冬 霜夜 冬

はたし霜 冬 氷 冬

氷聲 冬 露氷 冬

鐘氷 冬 氷の轄 冬

冬混雜之部

此部ハ、時令時令草木ニ
以テ、冬ノ品を以テ

炭 冬 炭 冬

炭竈 冬 獸炭 冬

楯 冬 廻炭 冬

白炭 冬 膏炭翁 冬

炭斗 冬 助炭 冬

炉 冬 埋火 冬

塗炉縁 冬 火燧 冬

火桶 冬 手炉 冬

湯婆 冬 蒲團 冬

衾 冬 衾 冬

紙衣 冬 頭巾 冬

綿 冬 綿 冬

足袋 冬 東綿 冬

綿帽子 冬 綿衣 冬

水漬 冬 肝 冬

皸 冬 寒瘡 冬

冬木之部 冬 新 冬

胡蘿蔔引 冬 葱 冬

枯野 冬 朽野 冬

冬木立 冬 寒草 冬

冬生類之部 冬 鷹 冬

鷹 冬 鷹 冬

鷹 冬 鷹 冬

鷹 冬 鷹 冬

○此書の本文をいろはは、
 月令以呂波分惣目錄と題号
 を名づけ別々賣出—ヤハ
 季節ふ用由なるの論李節に
 用ひきくぬ物までも俳狂の
 便ふなる事又八月葉艸木魚
 鳥の異名和名古名ハ聲ふをふし
 くりくいろは分ふ出は。本書ふ注
 解の—が—たりの又ハ出所の落
 する物ハ此目錄の條下ハ辨明を本
 書ふ二處三處—あり—委き談ハ何
 れゆもは—が—た物此目錄にて見ら
 べし
 沖津鳥 冬 此の部ハ恋—鳥—
 秋 湊 九—共—談ハ春の湊の所—
 部 春湊—出 湊の—け—
 水無月 六—ア—水無月の出處ヲ葉集
 部 万葉出 本文ふ—こ—故此處の
 余—准—して知る—其外狂。俳
 詩。哥の便—ふ—なる事多く載。故
 此目錄をかり—ても會席などハ懐
 中—く失念—備ふ—



三冬之部

冬の異名和名冬の神等
と十月の初日—

時令

此部ハ冬三ヶ月の時候
ふかり—る事—

冬之風

讀又音寒く吹き—
占冬南風吹ハ三日ハ間霜多—寅
考卯の日風ハ其月ハ風多—

○我やこの楮の—
 山の—
 枝—
 為家
 世野明
 蓮二

詩 冬風五字對句

同上

黒帝行威肅 雲岳千岩瘦

飛廉意氣雄 霜林萬葉飛

冬ヲツカサトル神ノ
イセイガオソロニイ
カセラツカサトル神ノ
イキモスサニイ

雲ノカツタタケモ風ガ
ツカサガヤセテニエル
シモノハ林モカセカフケバ
ア—ク木ノハガトビチル

詩 冬風 出自薊北行疾風衝塞起

薊北トイフ所ヲ出テユケバハゲシイ風ガ陣ゴヤヲフキタヲスヤウニオコリテキタ

沙磧自飛揚牛馬縮如蠅

スナモコイシモミナヒトリテニトピアカルユヘ牛馬モスクンテ子ツミホドニナツテアエエル

冬霧 秋の霧ほどふくはら霧冬のみんとかく水きふ

哥 三冬うちてわの影とてめさる川はまらやあまのまを成らん 其後

詞 知らず外まらぬれは神の考二水

狂 知きくれ風はゆるし個代も

冬日 黒道とて北のくまをゆく

哥 ぼくはとまぬるものあり流いまで

詞 ぼくはとまぬるものあり流いまで

俳 冬の目も人ほ舟の楫はく

狂 日おかげのこのまのけき

詩 冬日五字對句 同上

忽忽短晝光 漸過三竿外

融融浮和氣 初添一線長

詩 冬日詞 白居易

杲杲冬日出照我屋南隅

トシタル冬ノ日が出テコキ 負暄背日

坐和風入肌膚

ノ家ノ南ノスミヲテラス

ヒナヌボコヲシテ日ニ

ウロロムイテスハレバ

ノドカノ風が分分 初初似似飲飲醇醇醪醪又又

如如蟄蟄者者蕪蕪ハレメノホドハヨイサケヲ吞吞

カヘツタヤウニナリタ 外外融融百骸暢百骸暢中中

適適一念無一念無カラクソトハコ、ロヨウユルニテカ

ハスラカテナニ 曠曠然然忘忘所在所在心心與與空空虛虛

俱俱何何トナラカヒロクシテカラニテ井ルコトモ

冬冬日日唐唐宮宮中中ノ女女ノ又又針針ノワザヲ以以

故事故事テ日日ノ長長ミジカラコ、ロニハカルニ

冬冬至至ノ後後ハ一日一日ニ糸糸一一スチツ、多多

ク又又ハルト云云リ 唐唐雜雜錄錄ニ出出

冬冬月月 △月月さや △月月とさす

枕枕草草帚帚ハ老老のけいひ

たふへいといとぞらぬものわたり

さゆりハ澄澄きマツたの甚甚ききう

哥哥 拾遺集 友輔

あのおれはのぶ乃さやけさ

月のひらりのそりくちりたり

千載 平實重

秋秋をわさひひきふおのトわさく

こころふくもとある月月ノ耶

夫木 大納言經信

名流名流くよりそてめる嵐嵐く

むこころ月月をく風風がうり

續吉今 家隆

なごあついく夜夜袖袖よりうり

時時ふふくくる有有明明の月月

詞詞氷氷やとる。このえにふる。消消くま

るた。雪雪ふかふく。このまさうらぬ。

みんれ若若の末末ま。雪雪にさう返返さる。

氷氷もさうぬるけ。雪雪ふまおおく。

非非襟襟毫毫のあけえんをの月月 蒲蒲丈

冬冬月月やつまきさうけも松松ハ松松 其其角

狂狂まういといくやこの中中りれる敷敷い

老老のけいひぞまざるを月月 貞貞左

者者のあち 冬冬の雨雨もこほり

久久雨雨 冬冬の雨雨もこほり

多多くハ雪雪ふやうり

哥哥 ふるあのをにうり

嵐嵐やそふ吹吹こほり

為為家

この里も元かきつりつりやうぬに
外山をこれハちるそつりれる 衣笠

⑤非 雪のふきまきいなる板やハ羅人
扉のきもいれてさひしをの雨加十

⑥狂 たぐまも山ハ終つまらうそのあ
あれナド正にたにたかこせと 信徳

△山 眠 冬の山の姿をいふ。四季の山乃
姿をいふ詩あり次ふる

詩 四季山之詞

卧遊録ニ出

春山 淡冶而如笑 春ノ山ハツサリトシテ
人ノユメルヤウチ

夏山 蒼翠而如滴 夏ノ山ハアヲクトシテ
ウルホフヤウチ

秋山 明淨而如粧 秋ノ山ハサリトシテカ
ザリタルヤウチ

冬山 慘淡而如眠 冬ノ山ハモノサヒニウチシ
ツツタコノロナリ

右の詩の心を以て季に春ハ山ハ笑ふ
秋ハ山ハ粧冬ハ山眠ると三ツ出して夏の
山滴と季に用いざるも非の掟

△寒夜 冬の夜。秋の夜ハものさ
ひしさにわたりかめる物なれ

とそれよハやうかつてさむらに
わたりぬる冬の夜のさむらり

哥 夫木

為家

おのうせいろく里人のをり
おのうせいろくのねむりぬより

⑦非 雪をよもあふくを添ふ一鼠
夜をよもあふくを添ふ一鼠

⑧狂 うつれつも終ふをうて冬のおハ
あつれつも終ふをうて冬のおハ

詩 冬夜七字對句

詩礎

起看北斗寒垂地 鴛衾冷
オキテニホトノホニヒカリガ
サムゲニ地ニタレテミユル

俯听长江流有聲 獸炭消
フミテキタカチガアリコエ
ウツミイテキタカチガアリコエ

詩 冬夜五字對句

曉角催寒漏 アカツキノフエノ音ガ
サハイトケイヲモヨホシ

孤燈旋落花 ヒトツクトモシヒガヤモ
スレバハナラオトス

冬曉 △さむき朝 **非** 曉や我つけ
切る栲のまね 荷兮

哥 雪玉 △たきのまはまほ 凍くたる
暁のおもむきて袖ふもき月くた

詩 七字對句 詩礎
オクトモクモクニラ △冬ニカニラ
屋頭木葉翻寒片 茅店月

セウカクハイク △カクカク
牆角梅花吐暗香 板橋霜

カキノアタリニムメノハナガホシ
リトニホフ △イカニニシモカ
さむ空 **非** さむさを未りて見
ちりくねるけ 宙存

さむ △さむ **非** 三日月の一弦さ
むーいつく島 支考

凍 △さむ 凍ハおもふ
らで寒気ふくろくさるる

非 △さむ 枕州 △さむ 楮柳

はめたき △さむ 牛

哥 玉葉 △さむ 枝ふも
その月風やあやむき

非 △さむ 後地山林

狂 △さむ 梅翁

雪 △さむ 飛瓊 滕

哥 古今集 母貝之

山家雪 定家

田家雪 実蔭

柏玉 遠山雪

ひりりこえへり白たおのあね
雪玉 谷雪

雪の重ぬきをかきて谷の戸に
雪乃梢やさへ入らぬとて

同 川邊雪

氷の上にもつりかはる川
さきやまねの雪ふ及らん

夫木 湖邊雪 為家

引くもやはら山と風海つけく
いとゆふもしくちのまじ雪

風雅 行路雪 ねほく

旅人のまじり月夜もまじり
ゆふにゆるもまよふまじりね

夜雪 小舟

月の戸此ゆりそくくつへつは
つりゆる雪のひうりまじり

夫木 名所雪 為家

何れもゆるまじりの古々ままま
折もゆるぬ雪のまじり雪

詞 雪のつゆ。かきうた。かきた

まて。らりら。白ゆ 初雪十月の條

山ふい 柴人の雪落たゆ。山はたゆ。嵐の

ね系埋る 河川 ちんたきぬ。ゆき

きゆる。氷のくちりる 風いふき。雪

げのうせ。雪まよせ。又雪ふい風のたゆ

るよ。まよまじり 梅はふくまじり

つりぬ。梅士の雪の埋る。雪あ

たきし梅相。雪まのせむる梅ゆの。梅

のね系又へまぬ。そ外梅梅など白

く人のけいいたるくまじり 梅は

いとよ。まじりの雪まじり

木ふい 木ふいのね。梅はまじり。梅ふま

かよ。十人雪のねまはる。梅乃

ちんせのまはる。梅まじり

うぬ。雪まじり。余雪のまじり

梅はまじり 梅まじり

本もまじり

かきまじり。そり。雪まじり。雪まじり

右のまじり

土まじり

三冬 時令 冬ノ七 唐祖詠

終南陰山領秀積雪浮雲端

終南山ノ三子ガタカフニレバツモツタユキモク

モノハシニウイテアルヤウナ

林表明霽色城中增暮寒

林ノ上ニハレタルナシキガアキラカナトオモハシ

同 柳宗元

千山鳥飛絕萬徑人踪滅

山クノユキニトリノカヨヒモニハズイツクノ

孤舟蓑笠翁獨釣寒江雪

ヒトツノフナニニカサキタオキナガツテヒトリサムイ

雪日本 香爐峯雪

雪れふくふりた

ろり一條院

はしらく出させまいてかろる

のあつさぬいづらんとおほせれ

々れバ御前ま在々々清少納言こと

むはちくて御簾と巻上り帝

ことの外感いさせまうとやとれ

次ふちうれ詩の心を合せまう

詩 朗詠集 白樂天

遺愛寺鐘磬枕聽香爐峯

雪撥簾看

ノカベニ五首ノ詩ヲダイセラレタルソノウチ

ノ第四ノ詩ナリ 廬山トイフトコロハ遺ア

イキトイフテラニチカク

能 摻あたる寺内も雪の海 蝦明

雪山 香るる時ハ藏人所の衆大

内小参して藤壺ふ雪の山

とつきし一糸院の時より始て後

伏見院永仁のころ迄ハらりしとぞ今ハ

絶より枕草底ふ白志くすの千余日の

やに雪いとじううらるをばまふ武都

至老後もありたれがまね出しく

おまとのつまの山作まらぬ下こそ

あつさぬいづらんとおほせれ

能 富士ハ一担附のるおけるの山霞外

雪粥 雪のふりたるの 藤原仲文

院の御所へ参たるに院の御粥

おらしちたせて哥よあつと仰られまを

哥 白雪のふりたるの 白粥を

いとくふしる物ふるみたる
○俳 白室や此月の光を梳の術 東窓

粉雪 丹波の粉雪とりつる雪ハ
よねとつきふるいふに似ればいふ
わづ溜るゆたといふべきを丹波とこそ

鳥羽院種くわくまきて雪のふ
るふかく仰られと讃岐曲侍日記出

○俳 山風や雪の粉をさるひ賀兵卿
玉兔林とて粉雪とてするを分香

雪唐 柳絮 謝大傳安トイフス兒
女ヲ内ニテ支テ支テ講

論ス俄ニ雪ヲルヨツテ兄ノ子朗トイ
ヘルニ向テ曰白雪紛々何ニ方似タル

朗答テ空中ヨリ塩ヲフラスカゴトシ
トイヘリ又兄ノ女ニ向テ曰柳

絮ノ風ニヨツテ起散如シ安モ奇
才ヲ賞ニテ悦フ世説新語ニ出

○俳 ふるまをこれふけてもほろろ連国
のたとひ風ゆるゆるの柳小ハ素仲

雪 蕪武單于ニ使ヌ單于ト
ラヘテ北海ノ上ニオク食ニ

乏シトナガラ雪ト毡毛トヲ鬻
テ數日不ヒ死遂ニ漢ニ歸ル

放馬 齊國ノ管仲旅中雪フ
カキニアフテ道ヲ失フ其

時老馬ヲ放テ行クニ任ヒテ隨ヒ
行ハ遂ニ道ヲアヤラズトカヤ

雪花 六花。天上ニ瑞木アリ雪
ヲアツテ瑞木ノ花トス

○俳 馬の尾小雪の巻らる山崎の支考
雪溜るは枝地みッ六ツのくまな文洞

去ばる雪 木の葉をどいつり
たる雪のさらくこと

○俳 ねておきぬをこもるまつを荷風
雪肌 世間美人を賞する言葉

雪肌 世間美人を賞する言葉
まじりしと雪をさらしてはみる

雪肌 世間美人を賞する言葉
まじりしと雪をさらしてはみる

雪肌 世間美人を賞する言葉
まじりしと雪をさらしてはみる

雪肌 世間美人を賞する言葉
まじりしと雪をさらしてはみる

語りきハ随分事と云ふべしこれ
らの事うづり衣さの例もあや

雪空 雪催ひ。雪気（非）雪を吹く
月くくの耳ふ新く一品

雪と云とけりハ雪の空 梅五

哥 為相

月少るけの空をけき

雪聲 音をいづ

詩 雪聲詞

石泉凍合竹無風夜色沉

沉萬境空 試向靜中

閑側耳隔窓撩乱撲春蟲

フトモノシツクナウキニ耳ヲバダテキケ

ハニドヲヘダテハラクト春ノコロムシガキヤ

ウシニアタルヤウチオトガスルユヘ

雪消 昔ハ雪多クふる時小松餅并菓物を互ふ相饋る

これを雪けしは是を喰て

寒をわとるといふ心なり日並記事出

富士雪 富士ハ四時雪りる由へ御傘ハ雑とい又通俗

志連音あふや記等ハ冬とい此

事大論あり委く補遺不出

雪中之文

朝來六花呈瑞彌望為一

色之瓊瑤來歲之豊可知

矣老拙畏寒徒做衣安閉

門擁炉唯仰神仙來賞之而已

○書春月寒氣歳暮の條見合と

妙寒中の雪水を貯へつ移し

用ゆれば一切の熱毒を解と

雪中夜寒手足をぬ法。胡

椒をニツ割るるくさくさい

續古今 谷氷

為尹

河氷のさるるをばほらるる水の
ゆくもたたく氷のころる

新勅撰 湖邊氷

内大臣

馬のけうや氷のうんとゆくねの
ほもたたく氷のころる

柏玉 葦間氷

目録をへくおるぬらけり
あーの下もほらるる

夫木 薄氷

小特後

けさーもするけり
氷のころる

詞よとておる。嵐おる。氷の
ほらるる

入江。山彦。氷の袖。細代。音
たき。山川。ふー。氷のたき

さあ。氷の石。氷結ふ。江の氷。さ
舟もさるる。氷はるる。氷さるる

ーの羽風。むらさき

連 一をさるる氷のかき

宗祇

俳 氷のさるるも氷の白羽

あつ間すあれと氷の氷正秀

晴りて氷をまむ氷の嵐雪

氷幅や氷の中いさり松其角

狂 氷の上も氷のさるる

いらのあつ間すも氷の目吉入安

所さるる氷の結ひさるる

氷もさるる氷の氷あやじ十慶

詩 氷七字 對句

詩礎

寒生玉指紅先透寒侵玉

光遂金刀翠欲消冷浮銀

氷 河水氷ル時

後人氷ノ上ヲ行ト

○本朝信州諏訪湖モ氷厚クニテ人

馬氷ノ上ヲ往來ス先ッ氷未テ渡初ル

ヲ見テ人モ行キ通フニ春氷解ベキ前

ニ氷歸ル是ヨリ人モ不渡トイヘリ

氷聲 氷をこく声なり 氷はくじくと氷をこく声なり

又舟をすすすく棹ふてもうつこ此音をこく声なり

文 楊延秀 揮子敲氷文曰

釋子金盤照曉氷 彩絲穿

取當銀鉦敲成玉磬穿林

響音忽作玻璃碎地聲

ニニアケタコホリヲセアヲアケテ五色ノ糸デククリギンノドラノカハリニシテタキ玉磬

ハヤシライツレヤウチオトラサストオモハバキニハリノタカ地ニオチテタケルヤウチオトガシタ

露氷 露結ひく霜とちるといふ

鐘氷 かひの音のうえて氷るが如きなり 手足の氷ると

つしも手足は寒氣の入る氷るがぶとれをうかひも長ふおち

氷の轄 氷解るなり 雲脚抄出 為家

みもてハ田川よとて水車 氷のくさしうらとてくたり

冬混雑

炭 別名烏銀 種類 城炭 池田炭 炭頭 輪炭 炭團

右の外種類ハ次ニ記シ今振州池田の辺ややくりの池田炭又切炭

といふく日本諸州の茶人といふ此ところの炭を用ゆくぬ木を

やくといへばくぬぎ炭ともいふ

輪炭と池田炭の大成物を薄く切たる形車の如し故に名づく

炭頭ハ炭の俵一俵の内ふすと十五と大わりのあるをいふ

炭電 炭焼 小野炭 和哥 山山城をくは山同はくむ山常陸な

どなりよめく小野炭といふ

○炭がま山のくまに穴をほくくまを
ぬく薪を多く入ましく炭の焼く

○拾遺集 函山木と相まのまは橋つ
まをくまらささ小中の炭の好忠

夫木 司の人の炭やきまされぬとて
くまは人のたのむりのうハ おおく

詞花 山うまやく炭のの煙をさう
やうくまけのまをさうまう 匡務

金葉 炭のまに川煙さ小中山ふ
まけのまをさうまう 師時

新京 目較うまけまをさう炭のま
まうまうまうまうまう 式子内親王

○詞 とも木。すまき。まうまうま
まうまうまうまうまう ちびく煙

まうまうまうまうまうまうまう
まうまうまうまうまうまう けさ

まうまうまうまうまうまうまう
まうまうまうまうまうまう 炭のま

○まうまうまうまうまうまうま
まうまうまうまうまうまう 炭のま

○まうまうまうまうまうまうま
まうまうまうまうまうまう 炭のま

○まうまうまうまうまうまうま
まうまうまうまうまうまう 炭のま

○まうまうまうまうまうまうま
まうまうまうまうまうまう 炭のま

○まうまうまうまうまうまうま
まうまうまうまうまうまう 炭のま

○まうまうまうまうまうまうま
まうまうまうまうまうまう 炭のま

○まうまうまうまうまうまうま
まうまうまうまうまうまう 炭のま

○まうまうまうまうまうまうま
まうまうまうまうまうまう 炭のま

○まうまうまうまうまうまうま
まうまうまうまうまうまう 炭のま

○まうまうまうまうまうまうま
まうまうまうまうまうまう 炭のま

○まうまうまうまうまうまうま
まうまうまうまうまうまう 炭のま

○まうまうまうまうまうまうま
まうまうまうまうまうまう 炭のま

○まうまうまうまうまうまうま
まうまうまうまうまうまう 炭のま

○まうまうまうまうまうまうま
まうまうまうまうまうまう 炭のま

○まうまうまうまうまうまうま
まうまうまうまうまうまう 炭のま

○まうまうまうまうまうまうま
まうまうまうまうまうまう 炭のま

炭之 胡桃炭 唐宋ノ世ニハ炉ノ炭ニ
クルニテ用フルヲ上トス
故事

獸炭 唐ノ羊琇ト云ル人炭ヲ獸
ノ形ニ作り酒ヲアタムトカヤ
製法ハ炭十斤鉄屑十斤合を搗テ
糯米ニテ子リ乾テ用ル時ハ火キエズ

楮 △わさ火△骨蒸炭△わさのかくいハ
株杭ノ木の根を灰の中よこぎ
其上よ火をこけハ自然コ火ウウ
アコク山中多ク埋火の用トシ哥
おもろのうら門ミ火きじより

廻炭 炉中ハ炭とてむ昔古のたえ
げぢぢぢぢの置くる炭を
あげく客人がひくふ置るを炭を
非ニの程のそんを中トす其裔

白炭 △花炭△枝炭。多くハ躰
燭の木をややく灰中ハ埋
こぬまが白くする之枝の形ある也枝
炭ともいふ。河州光の瀧ややく

賣炭翁 △炭賣人之 非炭賣や
翁のほの鼻とを其裔

積火 變深 變ニツシニナリ 牙角
猶忿怒 牙ヤ角ノセウニナツタ火ノ
イリテイカセウニニエル

炭斗 一名烏府。炭入る器なり
うべ又ハ籠などいらくわて

助炭 助炭ハ炭をたをらるとて
炉のわらひのことなり

爐 △冊炉裏△地炉。炉ハ今茶人
の用るハ方一尺守之。山家の
もの又裏國のものハ其製大ニ昔
堂上ハゆいとも其製大ナリとも

埋火 △炉火。哥ハ炉火の題ハ埋
火と詠マ。又わさの詠ハ前ハ出

哥 夫木一山竹のちさじ合せ埋む史の
ゆきもろくて世もろくね 俊成

詩 賣炭翁詞 東坡

花炭も同所より出或ハ梅の花も
ふやれ竹も葉とも存は名品なり

非 白炭や若いのらうたの枝 二柳

非 二の程のそんを中トす其裔

非 炭賣や翁のほの鼻とを其裔

非 炭斗 一名烏府。炭入る器なり

非 助炭 助炭ハ炭をたをらるとて

非 爐 △冊炉裏△地炉。炉ハ今茶人

非 埋火 △炉火。哥ハ炉火の題ハ埋

シヨクコウニシキ 燕寝覆時籠 翡翠合

ガウキタウヤウチ 歡擁處效 鴛鴦

フトリノモヤウモモツテアリ 婦人ライダクト

キウチキレハモヤウクヲドリニチラスルヤウチ

蒲團 婦人の頭巾 婦人頭巾

蒲團 婦人の頭巾 婦人頭巾

狂 狂 狂 狂 狂 狂 狂 狂 狂 狂

紙衣 紙衣 紙衣 紙衣 紙衣 紙衣 紙衣 紙衣 紙衣 紙衣

頭巾 頭巾 頭巾 頭巾 頭巾 頭巾 頭巾 頭巾 頭巾 頭巾

足袋 足袋 足袋 足袋 足袋 足袋 足袋 足袋 足袋 足袋

綿 綿 綿 綿 綿 綿 綿 綿 綿 綿

束綿 束綿 束綿 束綿 束綿 束綿 束綿 束綿 束綿 束綿

綿帽子 綿帽子 綿帽子 綿帽子 綿帽子 綿帽子 綿帽子 綿帽子 綿帽子 綿帽子

狂 狂 狂 狂 狂 狂 狂 狂 狂 狂

二八の肩乃山のいさき 與射

日本 頭巾を著く人達 事を無礼と云

非 非 非 非 非 非 非 非 非 非

足袋 足袋 足袋 足袋 足袋 足袋 足袋 足袋 足袋 足袋

綿 綿 綿 綿 綿 綿 綿 綿 綿 綿

束綿 束綿 束綿 束綿 束綿 束綿 束綿 束綿 束綿 束綿

綿帽子 綿帽子 綿帽子 綿帽子 綿帽子 綿帽子 綿帽子 綿帽子 綿帽子 綿帽子

狂 狂 狂 狂 狂 狂 狂 狂 狂 狂

詞 鷹ノ詞

故鷹制 北風迴草盡

平原使馬開 如却月

野馬ニ 辟上角弓

當場意氣射生來

ノゴトクカカニトラセユニニ射ナド

追鳥狩 列卒をり

狩場ニ雉 鷹ハ

鳥ニ落艸 鷹ハ

カ草 鷹ハ

鳥ハ

教草 鷹ハ

ぬす立 鷹ハ

鳥立慕 鷹ハ

鷹鳥匠 鷹ハ

列卒繩 鷹ハ

鳥叫 鷹ハ

追立ると又鳥のさけふ声を

聞て鷹人のたくとよびるといふ

鷹ハ

鷹ハ

鷹ハ

鷹ハ

鷹ハ

鷹ハ

鷹ハ

鷹ハ

鷹ハ

鷹ハ

鷹ハ

鷹ハ

鷹ハ

鷹ハ

鷹ハ

鷹ハ

鷹ハ

鷹ハ

鷹ハ

鷹ハ

鷹ハ

鷹ハ

鷹ハ

鷹ハ

鷹ハ

鷹ハ

鷹ハ

鷹ハ

鷹ハ

鷹ハ

鷹ハ

鷹ハ

狂 ひりやう 狂人の女夫のなきが
あふはらへるせんくの神 芳室

詩 鴛鴦詞 古師老

江島濛 烟霽微 綠蕪深

處 神毛衣 江ノ中島カモヤノトキリデニ
ニクイノニテライクハハエテ

一雙去飛上 文君舊錦机 イッサツトクニオトドリガキレ
ニモゴロモヲセツクコトヲ

へんカクレバソコヲオドロイテタツテメオトク
レデトニテユクハサダメテ卓文君トイフヤウ

十ウツクシイ女ノオツテ井ルニシキノトヘ
イテソノニシキノエヤウニナルノデアラフ

詩 鴛鴦五字對 同上

文采負奇色 和鳴多好音 サオオフキシヨク
ウツクシイ

白頭心共在 交頸意何長 ハクトウコトモアリ
カウケテロロナク

鴛鴦 韓憑魄 カニヒヤウ
ハシ

大夫韓朋一名憑ト
云ヘル人妻甚美之

康王コレヲ養フ憑怨テ自殺ス
妻コレヲ聞テカナシミ或日玉ト

臺ノ上ニ上リテ遊ブトキ臺ヨリ落テ
死セリ懷中ニ書アリテ憑ト一ツニ葬玉

ヘトシルセシカド玉ユルガズシテ塚ヲナラ
ベテ別々ニ葬シカバ一夜ノ内ニツノ塚ヲ

木ハエテ上ニテ枝ト枝ト相連リ鴛
鴦來テ其木ニスム朝暮カナシミテ

啼コレヲ連理ノ枝ト云搜神記ニ出

鴛鴦の衣 夫婦やうびふは野の衣
をぬいぬいふる衣をぬいぬい

又を鳥の水みぢび居とつ。又

を鳥の雌雄 翅を交く時を

をいふとを鳥の相なるを

うぐ鴛鴦帳 鴛鴦幌をいふ

哥 ありぬきの余のおむかも
ふ代をさめるやのゆあ 家隆

鴛鴦の舌 堂上方又僧家ニ用る
眞高とらふ反らる鴛鴦

其形鴛の翅より似たり故名づく
又反ぬ杏を鴨杏といふなり

鳧

鴨の字ハ俗字ニ種類△真がも
△小鳧△も鴨△黒鴨△羽白

△あきり△さきり△沈鳧(圍青羽
鳥々々集あり。沖津鳥万葉集に出ず)

哥

拾遺(おおかみ神んたふるを乃
よみかものしををりいころちき 公任

千載(新修)入いさくららち羽の
みさの床よきねとじし 頭輔

夫木(可)んてまればちこりして
よれちちるわらのむき

詞

うかも。たんも。うさも。ゆも。
うものうた舟(かものうたを)あーうも乃

くらつとさつとあまかもめ。かもの
うらげ。かつこもも△わらむ△あち

の村を(いづの村か)あちいら
右の村あまの條よ見えべー

能

浮城もあやわるる月夜(嵐登
らくこ)坪の野の浮城くま 支考

狂

らんてもめらうてもさく比の中
まじとりてあふゆかも 貞木

鳧

王喬葉縣(今トナリ神
街アリ毎月朔且縣ヨリ

朝ニ至ル其来ルコトシバクナレドモ騎
ル所ノ車ヲ見ザレバ密ニ人ニコレヲ窺

セケレバ王喬至ルゴトニニツク鳧東南
ヨリ来ル即其鳧ノ至ヲウカシテ細

ヲハリケレバ一雙ノ鳧ヲ得タリ則
王喬ニ賜フ所ノ鳧ナリ

脛短

鳧の脛短(イトイヘドモコレヲ
續ガハ則悲 莊子ニ出タリ

水鳥

水鳥甚多(天鷲。
鷺。鵞。かかせ。鷺等)

專哥ふよハ。ぎ。かも。らどり。ふ
は鳥トクニ季ふ成りの前條よ出れ

哥(あもれを)これの心のはまらや
うきうけうつれくまらう人 人丸

お侍入江のまもまをけくま
みと野のまもまをけー 忠良

汐の泡比化 竹垣を立て自

ら取付くがぶとくると又

いけおく場所を養ひ、諸州

く由(味も中和を得、自然生

のりは大くても味不佳、
非) 産てもふふふの坊万籟

堀ひきや我ふへぬ水く、其角

蠣舟 浪花川岸所々舟と止

来てて他国の者、冬月来ると

同日来ると越年して又同日来ると

非) 蛎舟の尻、利全
堀ひきや我ふへぬ水く、其角

狂) 蛎舟と漢(の指乃好まぬ、道長

鯨 雄と鯨とら、鮪いと、事

非) 迹を、多鳳

狂) 志、喜木

氷魚 昔、川、里川

非) 氷魚、和名、魚

氷魚、野坡

非) 氷魚、和名、魚

氷魚、野坡

非) 氷魚、和名、魚

網代 川岸より木はらちて網

の廣がりたる形ありて氷魚のたぐ
よひこいれを再び出るを待ざる

かうにさるゝ網のかりりたるを
まろといふ意までやろといふ是を

くひ取とのを網代人も網代守とも
いふ委しく九月生類四十二丁ふ出

哥拾遺集 元輔

月影の田上の川よきまはま
あつろのいとのよきもえへたれ

新古今 慈田

網代木よいさうまのまふゆく
いこりやねぬるやう活の枯い免

金葉 皇后宮肥後

あまのよる川せまの網代木
かみまのよる川せまの網代木

夫木ふみりけり川のわらわら
流のまはらうねらりたる貫之

非 あんまにまかせて網代も支考
あつれまの網代もまきまき芭蕉

狂 口ろく人因果志はや小車此
あろの果のいをはるる貞徳

夜與引 冬の夜中の獸を狩時犬
を引くをいふこといふこと

柴漬 柴をふーといふ古言に生柴
を枝葉とも三四尺つふ切

く川水の浅きところ積華水の面
より少高し左とれ雜小魚の柴の下

ふ集るくふおつく網を四方ふ張て
柴を去れハ魚をくくゆふ入これ

寒気の時れまざ立春後川水ゆる
たふむわうてハ魚柴の下ふ集らば

。淀伏見其外所々ふれれもとて
て水の浅き所あくはら事やう

哥 夫木ふみりけり川のわらわら
のんかまはらまをいふません 俊頼

竹筍 △釜 魚梁の末ふけ置か
△このどたのめかり魚梁に

のびらほけ入る器く竹やう作る
能 名やう見て機後のはハ竹筍ハ二又

哥 万葉 山はまふせおきこりうら
つこりこりやうを我ぬすまふ

潤眼 鱒の種類四く長し眼大
△(廿) うるちへうるめといふ

非 並路中括ふま枝の煙眼が十調
而劫の素宅へまらうまらぬ乙州

狂 ちまういあうらうれ時ハ十二
徹ふかやうる目まやうたり貞柳

河豚 △ふぐと汁(名) 鮓(異) 西施
△(廿) 乳。河豚家の味いふ似

る也(名)づく。物ふれうらう腹ふ
くもへへうらう古名ふたうの

畧なり。毒ゆる魚こいあう人養ふ
へうら西施乳といふ其腹の積ら

うらうと美人の乳またくうらうり
狂 名ふまうらうらうらうらうら

妙。ふぐの毒まらうらうらうら
菜つハの葉のふぐ汁と用也(廿)

生海鼠 △海鼠△金海鼠。とらご
と虎彪ふ似る故名く

非 海鼠を八個を向のふぐ汁 止水

海鼠 彦火々瓊々杵尊ノ時諸魚
故事皆仕へ奉ルヲ申ス海鼠獨り

モノイハズコレニヨツテ天ノ細賣命
細キ小刀ヲ以テ其口ヲサク故ニ

今ニオイトテ海鼠ノ口拆ク是十
リ云云日本紀ニ出

海鼠腸 (非) これをや尻尾のしり
れされいあを 完中

鮓 △(廿) はつこの。大まら王鮓中
やうと叔鮓小うと銘子東園

あうらうらうらうらうらうら
る也(非)他国お切て賣を大魚の切身

り初細のはしと昔賞たるあふ
と(廿)の牙らふ今賤物と成て上用と(廿)

哥 万葉(縮つことあまれもせるい
火のあふ出る人我下おりい)

必用 此部ふ三冬の要用れ
事は集りしるす

養生 冬ハ夜早くいねて朝ハ日れ
出るをまらして起るをいし

冬占候 寅の日づの卯
の日雨ふれ来春五穀

のりい高し 又かの寅の日づ
の巳の日雨ふれば同あし

きの子お雨ふまば牛羊おなく死
まのつらのと卯の日風あれば人民大

燭ふ尤風ふきく土煙をく雲
のごく空まはじりて黄うる色有

ハ吉慶なり黒色赤色なるハ火
災あり紅紫を吉なり

冬々天氣 忽ちゆりくるハ雨己午
の日晴れば其月雨多し未

戌の日曇まば其月雪多し申酉の日晴ハ
其月霜多し子亥の日雨其月甚寒

飲食 此部ハ冬分人カあ
製する食物と集む

切下 冬大根又ハ蕪を薄くきり
てテ貯へ常お煮て喰ふ

莖漬 △莖菜。大根の葉を
塩漬ると莖漬といふ

生薑酒 酒ハ生姜と和し
ハ医者のおし可風

狂 丹をこぼりかせけと人としあは
かしくも酔ふ世ふことあされ徳四

鶏卵酒 酒ハ玉子酒和したる妙
あるはずハ料理重宝記に

鍋焼 餅 湯やきやあはし
焼くもゆり 苑羅

杉焼 杉の香と魚肉を移さん
がら杉板のくへあやくん

餅 杉やちやいれてハ赤ぬ底の塩一丸

風呂吹 △大根ふちあき△かぶら
吹。ふち大根と湯煮又

餅 ちやちやあけのえおち杜橋

狂 さいふくはくわくはくはくはく
くくよるこいひはくはくはくはく

納豆汁 大豆を煮て土壺ふ入
種をり待くまらに包

納め貯ふ用るに板の上にてよく
たき末をうす汁のてしき

煮るなり或ハ塩酒魚鳥などく
いへとも煮わたり僧家より初

非は... 許六
此句も禪僧の意をあらわす

在 納豆のけいさるの好ぶぬぬ
もあつちやうかんとまれも 百松

柚味噌 非破障まつくら尾の
柚とう那 北混

蕎麥湯 △そむがゆ。そばゆりら
△そばの粉と湯を和し

て食へるそば湯とゆふ。そばゆりら
ハ蕎麥の粉と文火にて焚ゆ時ハ

ゆめのおとくるとだー汁をかけ
て食用せん。そばゆりら

非 蕎麥粥やぬるのそばを天我
○右飲食の温熱を賞して喰ふ

ゆへ冬の季に。製法委しく日
本歳時記に出見

文化戊辰末秋發行 吉字屋市左衛門

入用字引集 全一冊

此字引ハ世俗日々に用ひる文字
と撰りあつたものを用ひざる遠
く文字とてよく取字とひくふ
甚とやく之真の早刻なり

須為

市澄

市云

ハ為偽
板也

文化元年甲子臘月發行

東都 須原屋長兵衛

皇都 野田次兵衛

浪花 奈良屋長兵衛

同 吉字屋市左衛門版

